

旧ソ連（特にカザフスタン）における「民族」と「民族文化」の変遷

－東田報告・渡邊報告へのコメント－

宇山 智彦

まず最初に、このセッションを組織した者として、設定した経緯・趣旨を説明しておきたい。

旧ソ連地域の大きな変貌によって、ソ連という時代は少なくとも表面上、急速に過去の歴史になりつつある。ということは、われわれがソ連時代を、少し距離を置いて、ソ連崩壊前やその直後とは違った見方で見るができるということでもある。過去の時代になりつつあるからこそ、ソ連時代の制度や心性が現在の旧ソ連諸国の社会や文化を規定している側面を、はっきりと理解できるとも言えよう。また、かつてのようにモスクワ・レニングラード中心の研究だけではなく、旧ソ連の地方や非ロシア人地域に関する研究の蓄積ができてきた今、ソ連について従来とは違うことが言えるだろうという気もしている。一昨年末から昨年6月にかけて書いたある拙論⁽¹⁾にも、そのような関心を反映させたつもりである（もっともこの論文は、ロシア革命以前のことに多くの紙幅を割いていて、必ずしもソ連時代に重点を置いてはいないが）。

この論文を書いている時、また書き終わった後、東田氏の修士論文や渡邊氏、高倉氏の最近の仕事を読んで、皆、ソ連時代の「民族」や「民族文化」のあり方という、少なくとも私から見て似たような関心を共有していることに驚いた（恐らく出発点はそれぞれ違うのだろうが）。特に示し合わせたはずはないのに、自然と一つの流れができつつあるのではないか、その流れの中でこれからどういう研究をしていったらよいのか皆で考えてみよう、と思って企画したのがこのセッションである。

東田報告、渡邊報告とも、旧ソ連における民族文化に関する具体的なデータに基づきつつ、単にその特殊性の記述に終わるのではなく、近代世界における文化のあり方・作られ方に共通な面を見いだそうとしている点で、高く評価できる。逆にまた、社会や文化を語る際にすべてを「民族」の枠組みで切るやり方を批判しながらも、「民族」の存在を否定したり「民族」概念を放棄したりする極端に走るのではなく、「民族」が概念装置として現実に大きな機能を果たしてきた事実を見据えようとしている点でも、両報告の姿勢は好感が持てる。

また、東田報告がカザフ音楽のあり方と概念化の変遷を具体的に跡づけることに重点を置いているのに対し、渡邊報告は、具体的なデータも豊富に盛り込んではあるが独自の理論的考察に重点がある。つまり、両者相補う関係にある。ただ、渡邊報告は時代的な変化を必ずしも重視していないので、民族文化のあり方の変遷をどう理論的に把握するかという点で、さらに掘り下げる必要が残されている。また両報告とも、「内容において社会主義的、形式において民族的な文化」というスターリン・テーゼを一つのキーワードとしているが⁽²⁾、果たしてこのテーゼはソ連時代終始一貫した機能を果たしたのだろうか。むしろその意味するところの時代的な変化に注意が向けるべきではないか。

もちろんそれらのことは、音楽学を基礎ディシプリンとする東田氏や、人類学を基礎とする渡邊氏の仕事の意味を低めるものではない。ここから先のコメントでは、歴史学を基礎として仕事をしてきた私の立場から、両報告を補う意味で、旧ソ連における「民族」と「民族文化」のあり方の変遷を、両報告に示された知見と私自身の知っていることを取り混ぜながら、整理してみたい。帝政期から現在に至るまでの時間を便宜的に時代区分し、それぞれの時代の大まかな特徴を箇条書きで示すことにする。

ただしこれは、今後の議論のたたき台にするための大ざっぱな試論に過ぎない。結論的なことを述べることはできないし、細部についてもさまざまな議論の余地があろう。また私はカザフスタン史研究者なので、主にカザフスタンのことを念頭に書いており、他の旧ソ連諸地域でここに書いたことがどの程度通用するかは、今後関心を共にする研究者たちの議論の中で考えていかなければならないだろう。渡邊報告を聞くとブリャートの状況も似ているように思われるが、それがカザフとブリャートの二者間の類似性（かつて多くが遊牧に従事していたこと、帝政期にシベリア地方主義者の影響を受けながら民族運動を展開したこと、帝政末期以来ロシア人と混住していること）ゆえなのか、旧ソ連諸民族全体の共通性を示しているのか、私は判断できない。

帝政期：

- ◆古いもの・異国のものへの関心というロマン主義的な時代思潮の中で、18世紀末にロシア人による少数民族の調査（民族文化を語る作業）が始まった。
- ◆19世紀後半以降、流刑されたナロードニキやシベリア地方主義者たちが、カザフ人・ブリャート人などの知識層と接触した。カザフなどの知識人はナロードニキと同じく人民への奉仕を目指したが、それは同時に民族への奉仕でもあった（注1の拙稿参照）。
- ◆渡邊報告がソ連時代について指摘しているような、伝統から「有害」な要素を取り除き「有効」な要素を保存するという志向は、既に帝政期からあった。それは、西欧・ロシア文化を選択的に受容して啓蒙活動を進めようという態度と表裏一体であった⁽³⁾。
- ◆カザフ知識人は、カザフ人もロシア国民であることを強調して、国民としての権利向上を図ろうとした。しかし民衆はロシア国民意識をあまり持たず、1916年にカザフ人など「異族人」に戦線後方での労役を命ずる勅令が出た際、戦後の権利向上のためにも服従は余儀なしとした知識人と、異郷で死にたくないとして反乱に立ち上がった民衆のギャップが見られた。
- ◆ロシア革命期、知識人たちは盛んに自治運動を行った。

1920年代：

- ◇ソビエト政権にとって、ロシア人と異なる文化を持ち、教育も十分普及していない非ロシア諸民族を、どうやって社会主義建設に引き入れるかが大きな課題だった。啓蒙という意味では、それは革命前の民族知識人の課題とも連続性を持っていた。そこでソビエト政権の目的に反しない範囲で、革命前世代の民族知識人の文化・啓蒙活動や、ナロードニキの系譜を引くロシア系民族学者の研究活動も継続した。
- ◇「内容において社会主義的（プロレタリア的）、形式において民族的な文化」というスターリン・テーゼは二重の意味で過渡的な性格を持っていた。第一に、理論的にこれは一国社会主

義・プロレタリア独裁段階のものとして生まれた。1925年に最初にこのテーゼを発表した時には、スターリンは将来の展望に深く踏み込んでいないが、1930年の共産党第16回大会報告では、社会主義が世界中で勝利すれば、内容においても形式においても社会主義的な文化が、単一の言語と共に成立すると明言した⁽⁴⁾。第二にこのテーゼは、社会主義建設に資する非ロシア民族出身の人材育成や、民族語による社会主義の宣伝の必要と強く結びついており、社会主義建設が進んだりロシア語が普及したりすれば、その意味するところは変わり得た。

◇大ロシア主義と地方民族主義の双方が批判されるが、特に前者が警戒され、ロシア文化は少なくとも理論的には、社会主義的・普遍的文化と明確に区別された。

1930年代：

▲遊牧民の強制的定住化と全面的集団化により、カザフ文化やブリヤート文化の重要な基盤である遊牧が消滅し、共同体が変質した。

▲大量粛清により、革命前からの民族知識人や革命・内戦期からの民族共産主義者が抹殺された。これは遊牧民定住化と共に、民族文化（およびその革新の試み）の連続性を断絶させ、文化の「内容」としての民族性は存立基盤を奪われていった。

▲対照的に民族史の研究に対しては政策的要請が強まり、民族起源論が民族学者の研究課題になった。

▲教育が普及し、識字率が向上した。これにより、「形式」における民族性を強調する必要性も空洞化し始めた。

▲1936年5月、モスクワで「カザフ文学・芸術旬間（dekada）」を大々的に挙行された。中でもカザフ・オペラ劇場とカザフ民族楽器オーケストラが「成功」を収めたとされる。公的に定義された「民族文化」の重要な機能の一つは、ソ連の多民族性を象徴し、連邦中央で飾りとして「見せる」ことにあったように思われる。

▲1937年にスターリンは、非ロシア人地域のロシア帝国への併合を「最小の悪」と形容し、大ロシア主義批判の弱화가始まった。

第二次大戦中：

△戦意高揚のため、ロシア人、ついで他の民族の過去の栄光が賞賛された。ロシア帝政と戦った人物も讃えられた（たとえば1943年版『カザフ共和国史』で、1837～47年のケネサル反乱が高く評価された）。ただし戦争末期には反ロシア的傾向への批判が始まった。

△民族起源論が、マル理論に依拠しつつ体系化された。中央アジア諸民族の形成時期は、非常に古いものとされた⁽⁵⁾。

△共通の戦争経験は、ソ連を故郷とする意識と、「ソ連人」としての統合を強めた。この経験が現在まで繰り返し表象され続けていることは、渡邊報告にある通りである。

第二次大戦後：

▼ジダーノフシチナによって、非ロシア人の英雄への大戦中の高い評価は逆転され、非ロシア人地域のロシア帝国への併合は進歩的な現象であり、反ロシア的な人物・事件はすべて「反動

的・封建的」という評価がなされた。

▼社会主義文化・普遍文化とロシア文化が重ね合わされ、スターリン・テーゼは、「形式において民族的、内容においてロシア的な文化」に部分的にすりかえられた。

フルシチョフ期：

▽スターリン期の抑圧は若干緩和された。革命前の文化「遺産」の研究が行われ、『世界の諸民族』シリーズが刊行された。またマル理論が1950年に葬られたにも関わらず、民族起源論的研究が継続された。ただし、反ロシア的な面を持つ歴史上の人物・事件が全面的に否定的に扱われるのはジダーノフシチナの時と同じで、以後ペレストロイカ期まで変わらなかった。

▽「新社会主義儀礼」のように、「社会主義的」文化の再定義の試みもなされた。

ブレジネフ期：

★戦後に教育を受けた世代が社会に出、形式（民族籍、人種的特徴）においてはカザフ人・ブリヤート人などだが、内容（言語、生活習慣）においてはロシア人と区別がつかなくなってしまった人々が増加した。「形式において民族的、内容においてロシア的」な状況が文化だけでなく人間そのものをも支配し始め、人格的分裂につながりかねない緊張を強いた。彼らによって、民族の「真正な伝統」の追求（形式においても内容的にも民族的な文化と彼らが考えるものの再創造）が始まった。

★民族史の研究はそれまで主にロシア人・ユダヤ人などの学者により行われていたが、この時期からカザフ人の学者も積極的に研究し始めた。

★他方で「接近と融合」、「単一ソビエト人民」の形成が強調され、ロシア語・ロシア文化の普及、生活様式の画一化はますます進んだ。当局が「接近と融合」を言いながら、民族的自己主張を部分的に許容するという意味でも、民族の「真正な伝統」を追求する人が、他方ではロシア的・ソビエト的な文化を享受するという意味でも、建前と本音の乖離が生じた。

ペレストロイカ期：

☆歴史の見直しがなされ、帝政期の反乱、民族知識人、定住化・集団化、大粛清などの問題が研究された。

☆カザフスタンでは、民族主義的言説と、カザフスタンの「多民族性」を誇る言説の双方が流行した。

☆ロシア人の中から、「実はわれわれの方が差別されてきたのだ」という主張が現れた。これは、「ロシア文化」と「ソビエト文化」・「普遍文化」が重ね合わされたために、かえってロシア人・ロシア文化の「形式における民族性」が尊重されなかったという逆説の結果と言える。

ポスト・ソ連期：

■旧連邦構成共和国による独立国家の建設、ロシア連邦内の民族共和国による権限強化が行われている。歴史上の英雄が賛美され、「民族文化ルネサンス」的な動きがあるが、その手法は、

民族起源論の利用、フェスティバルによる民族文化・民族史の表象など、ソ連時代のものを多分に引き継いでいる。

■他方でペレストロイカ期の民族主義的熱狂は失せ、民族問題へのアパシー（政権側も暗に奨励）が生じた。「内容的にロシア的・ソビエト的」な文化はまだまだ残っており、日常生活において民族の区別が常に問題になるわけでもない。民族主義的な「語られる文化」は「生きられる文化」としての民族文化を吸収しつつあるが⁽⁶⁾、そのことはむしろ民族文化を言説のレベルに閉じこめ、現実には人々が生きている文化の複合性・無民族（無国籍）性を変えることはできずにいる。

注

1) 宇山智彦「カザフ民族史再考：歴史記述の問題によせて」『地域研究論集』第2巻第1号、近刊。

2) ただし本報告集に収められた東田論文ではスターリン・テーゼは触れられていない。

3) 例として、『ステップ地方新聞』の一記事（1894年）を挙げておこう（同誌の編集部が書いた文章で、筆者はロシア人である可能性もあるが、当時のカザフ知識人で似たようなことを書いていた人は少なくない）：

「カザフ人の道徳的基盤は揺るがされ、先祖の言い伝えと遺訓は忘れられつつある。ステップに入り込んでくるタタール人が、邪悪な宗教的狂信を利するために、カザフ人の生活の独自な特徴を色褪せさせ、民族の言い伝えを歪めたり、自分がでっち上げた愚かな作り話で置き換えたりしようとしている。古い習慣の多くは、道徳的純潔性の印をとどめている。＜しかし＞われわれは、どんなことがあっても古いものを守ろうというのではない。反対に、われわれの考えるところでは、古いものの中にあるすべての悪いものは即刻忘れ去られなければならないし、知的発達の段階でより高い位置にある他民族の生活の中から、新しいものを取り入れなければならないのである」

Dala ualayatining gazetî: Âdebi nûsqalar / Literaturnye obraztsy. 1888-1894, Almaty, 1989, pp. 556, 567.

4) *XVI s"ezd Vsesoiuznoi kommunisticheskoi partii (b): stenograficheskii otchet*, M., 1930, pp.54-56, 290-291. なお、この「単一の言語」とは、ロシア語やドイツ語ではなく、「何か新しい言語」であるとしている。

5) 1942年にタシケントで民族起源に関する会議が開かれ、考古学、人類学、言語学、歴史学の手法を組み合わせた新しい学問としての「民族起源学」の成立が謳い上げられた。民族学者トルストーフは、中央アジアの現存諸民族の形成過程はいずれも紀元前第1千年紀後半に始まり、紀元後10世紀前後には終わりに近い段階に達していたと報告した（注1の拙稿参

照)。

なお渡邊報告5～6頁に関連して、民族起源論や民族史・共和国史研究が、結果として、隣接共和国の挑戦に対して自分の共和国の領域の正当性を証明しようとする（または逆に隣接共和国に挑戦しようとする）民族エリートの利益に適ったのは確かだが、もともとこれらの研究を組織・奨励したのは、ソ連指導部とモスクワ・レニングラードの学者であって、ソ連の民族政策の正しさを内外に示すことの方に主目的があったのではないかと思われる。また、ある地域に別々の時代に住んでいた民族集団の連続性を強調する*avtokhtonnost'*（原住性、自生性）の考え方により、共和国史と民族史の内容が近くなったのは確かだが、等価になったとまでは言えない。ただしタジキスタンでは共和国史が『タジク人の歴史』というタイトルで出版され、前近代については中央アジアのペルシア語圏全体（つまりウズベキスタンを含む）の歴史を書いていた。

6) 本報告集に収められた東田論文では省略されているが、シンポジウムのために提出された東田氏のペーパーでは、現実に継承されている「生きられる文化」と、他者の視線が内面化されることで表現される「語られる文化」という関本照夫氏の議論を応用して、「語られる文化」としての「ソヴィエト・カザフ民族文化」が、「生きられる文化」の領域をも浸食しつつあることが述べられていた。